

町史編さん室だより

令和9年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ 総務課町史編さん室 ☎ 2511

前回の一級町村制の施行と村勢概要でもお伝えしたとおり、この時代は、第一次世界大戦後の不況の嵐と世界的な金融恐慌によって、我が国の経済界はもとより、安平村においても開拓史上最大の不況に見舞われました。一方で、安平村の農業は自作農の創設や滝川産乳組合員らの入地など一大転換期となりました。

第六回

一級町村制時代の産業事情

産業事情



農業

大正末期から昭和初期にかけての深刻な不況の襲来により農産物価格が暴落し、加えて、昭和六、七、九、十年の四年続きの冷害凶作は、安平村の農家にとつて致命的な痛手となった。

このような経済的危機に対処するため、安平村では昭和八年から十二年までの「安平村経済更生五カ年計画」を策定し、その目的達成に努力が払われた。

また、この時代の農業上の特徴の一つに、自作農創設が挙げられる。開拓初期の農業は少数の地主と多数の小作人という農業経営形態で開拓が進められ、小作農の占める比率は著しく高かった。このような中、第一次世界大戦後における農民運動や小作制度調査会の設置などの小作農問題対策によって自作農創設の機運が高まりはじめ、安平村においても昭和四年頃から村内各地の大農場が次々と自作農創設に踏み切り、昭和十年までの間に一六の地主が開放した面積は一五九七ヘクタールに達し、小作農から自作農となった者は一三五戸にも及んでいる。

畜産業

明治から大正初期にかけて村内の大小牧場は多数の馬を飼養していたが、その大半は昭和初期までに牧場経営を廃止し、北海道炭礦汽船株式会社などに譲渡、あるいは自作農創設のため開放された。

一方、動力農耕機械や運輸機関が未だ発達していなかったため、一般農家における農耕馬の飼養が盛んに行なわれるようになり、各種品評会や競馬会、家畜市場なども毎年開催された。

酪農業

安平村における酪農の創始は大正末期で、搾乳業者のほか一般農家でも乳牛を飼養する者が増え始め、山田村長をはじめ安平村産乳組合などの積極的な乳牛導入推進運動によって乳牛頭数も次第に増加してきた。しかし、昭和初期の世界的不況による乳価の下落等は、村内酪農界にも大きな影響を及ぼした。

このような中、昭和五年四月、滝川産乳組合員ら三二戸の、遠浅、フモンケ（現・早来富岡）地区への集団移住は、村内酪農界に一条の光明を与え、その開拓には幾多の困難と苦労があったが、組合員らの一致協力によって短期間で開拓が進められた。

さらに、昭和八年には森永練乳株式会社胆振工場（早来）および北海道製酪販売組合連合会遠浅チーズ工場の創業によって、安平村の酪農業は急速に発展し、昭和元年の乳牛飼養頭数二九九頭が、昭和五年には四五六頭となり、昭和十三年には一三八〇頭と飛躍的な増加をみせ、酪農大国として全道酪農業振興の起爆剤的役割を果たした。

林業

明治時代から大正初期にかけて好況にあった木材景気も、原始林の濫伐による林木の減少によって次第に下降線をたどるようになり、大正

末期から昭和初期は、折からの不況により林業が最も衰退した時期であった。

このため林業関係労務者の転出者が増え、大正十二年の人口八五五七人が、昭和三年には七九五三人と著しく減少している。

工業

明治時代に創業して開村間もない安平村に工業景気をもたらした早来の桜組製炭所や追分の北炭コークス製造場などが、安平村から姿を消してからは、工業界もしばらく不振の状態にあった。

このような中、昭和初期に極東練乳株式会社が追分分工場（集乳工場）を設立。また、昭和五年、滝川産乳組合員らが集団移住し酪農業をはじめたことにより、北海道製酪販売組合連合会が早来および遠浅に集乳工場を設立した。

その後、昭和八年には森永練乳株式会社が早来に胆振工場を建設。北海道製酪販売組合連合会でも同年遠浅にチーズ工場を設立し、これら二大製酪工場の創業によって、安平村工業界にもようやく明るい兆しが見えはじめた。



遠浅チーズ工場（昭和8年設立当時）

	昭和3年	昭和元年	大正12年
戸数	1,572戸	1,685戸	1,765戸
人口	7,953人	8,373人	8,557人
男	4,086人	4,311人	4,636人
女	3,867人	4,062人	3,921人

戸口数の推移（各年12月31日現在）